

近代教科書と再話される「国引神話」

大日方 克 己*

School Textbooks and the rewriting *Kunibiki* - tales in Modern Times

OBINATA Katsumi

キーワード：教科書、国引、近代、風土記、神話

はじめに

『出雲国風土記』（以下、風土記）意宇郡条の冒頭に記される意宇の名称の由来譚は、「国引詞章」「国引神話」などの呼称でよく知られている。

風土記の「国引詞章」はその印象的な表現と物語性により、近世の国学者本居宣長、内山真龍、伴信友以来多くの関心を集め、研究されてきた⁽¹⁾。文学的表現、国引された地域の比定、「国引詞章」そのもの成立や歴史的な性格など多岐にわたるが、これらをすべて総括した研究史は現時点ではまだない。わずかに武廣亮平が1990年段階での研究史を纏めているが⁽²⁾、それから30年、それに続く試みはない。また近世から第二次世界大戦期までの研究とその歴史的な性格の総括もまだ試みられていない。

とくに昭和戦前期の「国引神話」研究史を考える時に、その影響力の大きさ、強さから、小学校・中学校教育における「国引神話」を無視することはできない。子どもの時期にふ

れた「国引神話」のイメージがその後の神話観や歴史観、社会観に与えていった影響も考えなければなるまい。また「国引詞章」と比較すると、子ども向けにわかりやすく大きく改変され、近代国家の膨張主義、アジア・太平洋戦争期の「大東亜共栄圏」の建設とその思想としての「八紘一宇」と結びつけられていく様相がうかがえる。

それにもかかわらず、近代教科書のなかの「国引神話」の分析、子ども向け諸書に収録された「国引神話」についての分析、それらを近代の歴史のなかに位置づけていく作業はほとんどなされていない⁽³⁾。

本稿は、それらを検討していく前提として、昭和戦前期の教科書・指導書にみえる国引神話と、その背景となる児童向け諸書に採録された「国引神話」を整理し、課題を提示してみたい。

なお本稿では、引用を除いて、風土記意宇郡条の意宇地名起源説話としての国引の話を目指す場合に「国引詞章」とし、それ以外の再話された国引の話は「国引神話」「国引」と

* 島根大学法文学部社会文化学科

する。

1. 小学校国定教科書の「国引」 —国語と音楽

小学校の国定教科書に「国引」が登場するのは、1934年の『小学国語読本 尋常科用』3（2年生用）からである。1941年に国民学校令によって尋常小学校が国民学校初等科に改組されると、2年生用の国語教科書『よみかた』3、『ことばのおけいこ』3、音楽教科書『うたのほん』下に採用された。戦後の教科書では姿を消す。各教科書に採用された「国引」の特徴を示してみよう。

(1) 『小学国語読本 尋常科用』3の「国引」

1934年から使用された『小学国語読本 尋常科用』3の第11単元「国引」を引用する。

十一 国びき

大むかしのことです。

神さまが、どうかしてこの国をもつとひろくしたいと、おかんがへになりました。国をひろくするにはどこかのあまった土地をもって来て、つぎあはせたらよからうと、おかんがへになりました。

神さまは、うみの上を、ずっとお見わたしになりました。すると、東の方のとほい国に、あまった土地のあるのが見えました。

そこで、神さまは、その国に、太い、太いつなをかけて、ありったけの力を出して、おひきになりました。

「こっちへ来い、
えんやらや。
こっちへ来い、
えんやらや」。

と、かけごゑいさましくおひきになりますと、その土地がちぎれて、うごき出しました。さうして、大きな舟のやうに、うみの上を、ぐんぐんとこっちへやって来ました。

神さまは、その土地をこの国につぎあはせて、国をひろくなさいました。しかし、まだせまいとおかんがへになりました。

そこで、またうみの上をお見わたしになりました。こんどは、西の方のとほい国に、やはりあまった土地のあるのが見えました。

神さまは、その土地にもつなをかけて、

「こっちへ来い、
えんやらや。
こっちへ来い、
えんやらや」。

と、力一ぱいおひきになりました。これも、大きな舟のやうにうごいて、こっちへやって来ました。

神さまは、かうして日本の国をひろくなさったといふことです。

(pp.30～35)

風土記の「国引詞章」と比較すると、「こっちへ来い、えんやらや」という掛声や、国を引く具体的な描写を入れるなど低学年の子ども向けの創作を加えているほか、次の点が注目される。

- ①神名を八東水臣津野命ではなく「神さま」としている。
 - ②国引されるのは「東の方」「西の方」の遠い国と抽象化されている。
 - ③国引によって継ぎ足されるのが出雲ではなく「この国」「日本の国」としている。
- 八東水臣津野命による出雲の国引ではなく、

日本の国土拡大のための「国引」として再話されているのである。

この点について、同時に発行された指導書、小林佐源治『小学国語読本 新指導書 尋常科第二学年前期用』⁽⁴⁾は、第二編「各課指導の実際」十一「国びき」において、

本文「国びき」なども他国の人では読んでも意味がわからんが、日本人にはしっかり意味がわかる。国が狭いといって方々から国を引きよせる御苦心をなされる。今日我が国威が発展して朝鮮を併合する、満洲国を建設する、何だか昔の神の御心を体して国引してゐるのではないかとまで連想されて嬉しい。(p.230)

と、日本国の「国引」と現実の韓国併合、満洲国の建設を直接重ね合わせている。

そして教材の解説として、

日本の神様は日本の国を生命としていらっしゃる。日本は狭いから広くしたいと思召になったことである。本文の題にも「国びき」とあるが、これは面白い。他の国を征服するのではなく、本文の様に「どこかあまった土地をもってくる」。一言ではあるが日本の平和を愛し人を愛する国是が表はれてゐる。(pp.231～232)

と、「あまった土地をもってくる」のだから、「征服」ではなく、「平和」な行為だと説明する。またそれは「神様」の「思召」、神意であることを強調する。「指導の実際」の項でも

神様が国を広くしようとなさった心持を会得させ、「神」「土地」等の新字を授けるのである。(p.234)

と、国土拡大の神意と、新出漢字としての「神」「土地」を教えこむことを示している。

風土記の「国引詞章」は、「国」を引いて来るのであって、「土地」とは表現されてい

ない。「土地」と読み替えたことの意味は、この指導書が「説話資料」として、松村武雄編『世界童話大系』(以下、『童話大系』)所収の「国引」⁽⁵⁾を引用していることからうかがうことができる。

素盞鳴尊から四代目のお孫に八束水臣津野命といふ神さまがいらっしやいました。ある時、臣津野命は出雲の国をつくづくとごらんになって、

「こんなに地面がせまくては、みんなが思ふやうに田畑を作ることが出来ない。どうかしてもう少し大きくしたいものだ。」(p.240、『童話大系』p.55)

田畑を作る土地の拡大を意味しているのである。

この『童話大系』所収の「国引」は、1921年出版の森林太郎(森鷗外)・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑編著『標準於伽文庫 日本神話 上』(以下、『於伽文庫』)所収の「国引」⁽⁶⁾と同文であり、この再話は遅くとも1921年まではさかのぼる。

『於伽文庫』、『童話大系』所収「国引」と『小学国語読本』では異なっている点がいくつもあるが、とくに次の3点が注意される。

- ①『童話大系』では、国引きの神が風土記通りに八束水臣津野命であるのに対して、『小学国語読本』では単に「神さま」と一般化されている。この点については前述した。
- ② 引かれる土地は、『童話大系』では4ヶ所ともに「新羅の出ばな」だが、教科書では「東の方」「西の方」と曖昧な表現にしている。
- ③『童話大系』では、国引は八束水臣津野命が「御家来たち」を動員した集団作業になっているが、『小学国語読本』では「神さま」の単独の作業になっている。次の

1941年の国民学校教科書でも変わらないが、単独作業か集団作業かの違いについては、後述する。

①②について、『小学国語読本』では小学校低学年の発達段階にあわせて簡易で一般化した表現した面もあるが、前述のように国引を日本の拡大と重ね合わせるためでもあったと考えられる。しかし「指導書」で「新羅の出ばな」を繰り返し登場させる『童話大系』を引用していることは、韓国併合と国引とを重ね合わせて指導することが期待されていたといってもよい。

③については、この前後の時期に発表されている児童劇「国引」との関係も注意される。

1929年出版の長谷山峻彦『続児童唱歌劇集』の「奉祝国引き」は、八束水臣津野命の号令下、「臣下」が綱を引いて国引をする設定である⁽⁷⁾。

八束水臣津野命の音頭取りで、集団で国を引く作業をする話は、1912年の桔梗郎（山本完蔵）『歴史お伽 日本神代噺』が早い例の一つになる⁽⁸⁾。そこでは、淤美豆奴神（八束水臣津野命）⁽⁹⁾が「沢山な神様をお呼びよせになり、「サア、これからアノ島を、此所へ引張って来るのじゃ」と、一同に仰せられ」「大勢の神様が、足拍子そろへて、エイエイと御曳きになるのです」（p.105）と、多数の神による集団作業として語られる。

最後には

明治になってから、清国との戦争に勝って台湾が我が日本の領分となり、露西亜と戦って樺太の南部が我が版図となり、去年八月には朝鮮が我が日本のものとなりました。この事を天の上で御聞きになって、淤美豆奴神は、きっと御喜びになってゐられませう。（pp.111～112）と、日清戦争以来の領土拡大と「国引」を重

ねあわせている。

「奉祝国引き」は集団での国引きをする児童劇だったが、教科書記述に合わせて、神単独による「国引」の児童劇も作られた。

1935年に出版された三浦藤作『実演学校劇 尋二の巻』の「国びき」⁽¹⁰⁾もその一つである。同書は「専ら尋常小学校第二学年児童の実演に適する学校劇のみを集めたもの」であり、「なるべく小学校の教科書と連絡ある材料を採った。即ち、新『小学国語読本』及び新『尋常小学修身書』等の内容までも参照し、これと連絡を保つことにつとめた」ものだという⁽¹¹⁾。この「国びき」は『小学国語読本』の「国引」に対応して、17分の童謡童話劇として創作されたものである⁽¹²⁾。

「国引き」の昔噺をなるべく多くの人々を登場せしめ得るやうに脚色したもので、多数の「村の人」・「れふし」（漁師）たちを登場させるが、国引き作業そのものは「神さま」が行い、「村の人」・漁師たちは「驚嘆」の声をあげながらそれを見守る役回りに設定されている。それは神の力の偉大さをたたえるものであり、小林佐源治の指導書にいう「神さまが苦心して国を引きよせられたことを授けるのである」にも対応するものであろう。

このように教科書の内容は、児童劇と合わせて教え込まれることが期待されていた。その方法は、次の国民学校期にはより顕著になる。

（2）国民学校2年生用教科書の「国引」

国民学校初等科では、以下の2年生用教科書に「国引」が採用された。

- ①『よみかた』3
- ②『ことばのおけいこ』3
- ③『うたのほん』下

『よみかた』は、これまでの『小学国語読

本』1～4（1・2年生用）に対応し、『ことばのおけいこ』は、『よみかた』の教材に即応して、話すこと、書くことなどの国語活動を習得させるための教科書である⁽¹³⁾。『うたのほん』は音楽教科書である。

『よみかた』3の「国引き」をみてみよう。

三 国引き

大昔の こと です。

神さまが、国を 広くしたいと お考へに なりました。

神さまは、海の 上を お見わたしになりました。東の 方の とほい、とほい ところに、あまった 土地の あるのが 見えました。

神さまは、その土地に 太い つなをかけて、ありったけの 力を 出して、お引きに なりました。

「こっちへ 来い、えんやらや。

こっちへ 来い、えんやらや」。

かけごゑ 勇ましく お引きに なりました。その 土地が 動きだして、大きな 舟のやうに、ぐんぐんと こっちへ やって 来ました。

神さまは、その 土地を つぎあはして、国を 広く なさいました。

神さまは、また 海の上を お見わたしに なりました。

こんどは、西の 方の とほい、とほい ところに、あまった 土地の あるのが 見えました。

神さまは、それに つなを かけて、「こっちへ 来い、えんやらや。

こっちへ 来い、えんやらや」。

と、力いっぱい お引きに なりました。これも 大きな 舟のやうに 動いて、こっちへ やって 来ました。

神さまは、かうして 国を 広く な

さったと いふことです。(pp.13～p15)

『小学国語読本』と比較すると、省略した部分が少なからずあり、より簡潔になっているが、基本的に内容は同じである。

これに対応する『ことばのおけいこ』では、『よみかた』掲載の「国引き」の一部を抜粋したり、まとめたりした次の文を書きとらせたり、読み取らせたりする⁽¹⁴⁾。

『よみかた3 教師用』では、「侵略」批判に反論し、拡大の正当化と「八紘一宇」を説く。

かかる種の説話に対して、ややもすれば侵略主義呼ばわりをして教育的に否定せんとする者もあるが、この神話のどこにさういった意味があるであらうか。原文に「国之余有耶見者国之余有詔而」とあるやうに、捨てて顧みられない辺土の余を引寄せてそれを経営し、そこに独自の文化をうち立てようといふのである。もしそこに侵略的な心があるならば、一体誰に遠慮して「国の余ありや」とことわる必要があらう。国際関係のやかましい近代ならばともかく、悠々漠々たる太古に於いて、なほ「国の余」を探さうとする謙虚な心を見るべきである。八紘一宇もかくてこそ世界を光被すべき道なのである。(pp.80～81)

この国民学校期の教科書の特徴の一つに「うたのほん下「国引き」と連絡して取り扱いに考慮する」⁽¹⁵⁾とする点がある。

音楽教科書『うたのほん』下でも、第3単元として「国引き」が配当された。以下のやうな歌詞である。

一 国 来い、
 国 来い、
 えんやらや。
 神さま

つな引き、
お国引き。
二 しま 来い、
しま 来い、
えんやらや。
はっぼう

のこらず

よって 来い。(pp.11～12)

『うたのほん 下 教師用』では、「国引き」の「歌詞と説明」において、

「よみかた、三」の「三、国引き」に取材して作った歌詞である。

之は「出雲風土記」意宇の条に出て居る八束水臣津野命が新羅の御崎、北門佐伎国、北門良波国、高志都都の御崎から国のあまつたものを切りとり、綱をつけて引き寄せ、出雲国に縫ひ合わせたといふ神話で、所謂八紘一字の精神を説いたものである。(p.65)

また「指導要旨」において、

我が国古来の神話に因むこの歌曲を歌はせ、八紘一字の精神を涵養する。(p.66)

「指導要領」でも、

歌詞の根本精神は、八紘一字にあるのであって、決して他国を侵略するの意でない。この点を、暗示するやうに取扱ふことが肝要である。神話をあく迄も神話として無邪気に歌はせ、強ひて現実的な説明を与へないで取扱ふところに妙味がある。(p.66)

とあり、繰り返し「八紘一字」の精神を強調し、その指導を暗に求めている。

さらに体育舞踏でも「国引き」をとりあげる⁽¹⁶⁾など、複数の科目を通じて、「国引」とその思想の指導を、小学校低学年のうちから求めているのである。「緊密な縦横の系統性をもって、身動きもできず逃れようもなく、

子供たちの心や生活は「皇国民錬成」一筋に教育されていった」(17) 一端を、「国引」にも見ることができるだろう。

2. 中学校国語教科書の「国引」

小学校教科書に先行して1920年代から複数の中学校国語教科書に、渋川玄耳が1910年に発表した「国引」⁽¹⁸⁾が掲載されている。

① 1924年、明治書院編『国文新選』2⁽¹⁹⁾

② 1926年、千田憲編『新編国文読本』1⁽²⁰⁾

③ 1926年、垣内松三編『国文新編』1⁽²¹⁾

④ 1927年、垣内松三編『国文鑑』1⁽²²⁾

また商業学校用教科書にも採用された。

⑤ 1928年、垣内松三編『商業国文新編』⁽²³⁾

千田憲編『新編国文読本』では1936年の第4版にも掲載されているが、『国文鑑』には1932年の第2版以降掲載されていない⁽²⁴⁾。

また北原白秋の詩「国引」を掲載した教科書もある。

⑥ 1937年、芳賀矢一編『帝国読本』1⁽²⁵⁾

次にこれらの特徴をみてみよう。

(1) 中学校教科書と渋川玄耳「国引」

渋川玄耳の「国引き」は、1910年に出版した『日本神典古事記噺』(以下、『古事記噺』)の一部である。冒頭に記された「くりごと」によると、『古事記』の話を子ども向けに語ったもので、面白がらせようと「空想的な敷衍に過ぎた所も多い」という。また『古事記』だけでなく、『日本書紀』や風土記によって話を増減させているが、「子供相手の本だから一々出処も示さず、取捨の理由も挙げない」と断っている。そして、「少しく時勢に感ずる所もあるので、取敢へず、稿本の一部を出版すること」にしたという(pp.1～3)。

『古事記噺』の「国引」は以下のとおり。

諸神諸神がお生みに為った日本は初の程は小さくて足りない処が多かったのを、子孫の神々がだんだんに修理を加へ玉ひて今の様な立派な国と為ったのである。

出雲の国は取り分け小さかった。極幅が狭くて帯の様であった。素戔嗚命の四世の孫に臣角命といふ方が、いかにも是では狭過ぎる、ちと縫ひ足さなければ可けないと思召し立たれた。

そこで、海岸の巖の上に立って、何処か「国の余り」は無いかと、遙に西の方を御覧になると漫々たる大海を隔てて、彼方に新羅の国（今の朝鮮）が見える。

「おゝ有る有る、新羅の岬に国の余りがある、あれを引き寄せて、此の国に縫ひ合わせよう」

と、臣角命は神通力を顕はして、其の新羅の国の出鼻をパクリと鋤取って、ザクリと衝き放して、ズバリと切り分けて、さて三縵の大綱を打掛けて、其国の片に結びつけ、エイヤエイヤと手繰り寄せ、そろりそろりと引き寄せて「国来々々、此処まで来い」と、とうとう引きつけて縫ひ合はされたのが、古津から杵築の岬の辺である。此時国引きの綱を繋ぎ止めた杵が、即ち、今の三瓶山といふ山、又其綱は蕨の長浜に為って居るのである。

まだこれでも出雲の国が小さいと、此度は、北の方に、国の余りは無いかと御覧に為ると満洲の方に大分広い所が見えた。早速其処を切り分けて又もや三縵の綱打掛けて「国来い国来い、此処へ来い」と引き寄せて接ぎ合はされたのが、今の秋鹿郡あたりに為った。

今少し足さうと言って、東北の方を探

して其国の余りを引寄せて、とうとう今日の出雲国がすっかり出来上がったのである。

神代より幾千萬年を経て、明治四十三年に為って、彼のちぎり残りの朝鮮の全部が、遂に悉く我日本に引かれて了ふことに為った。 まだまだ世界には、我日本が智仁勇、三よりの綱打掛けて引寄すべき国がいくらかも有るであらう。 (pp.60～62) (下線、引用者)

以上が本文であるが、最後に細字で次の一文を付け加えている。

臣津野命、国を引きをへて杖をつき立てて、「おゑ」と言われたから、其処を意宇と名付けた。「おゑ」といふのは「あゝ」とか「うゝ」といふのと同じで、疲れた時に出す声である。(p.62)

「意宇」の地名由来を説明する最後の細字部分を除いて、教科書に採録されている。大きな特徴は次の3点である。

① 引いてくる国を、新羅のほか「満洲」「東北の方」としている。風土記の「北門佐伎之国」⁽²⁶⁾、「北門良波乃国」を「満洲」に、「高志之都々乃三埼」を「東北の方」に読み替えている。

② 一度国引きをした後も、まだ小さいとしてさらなる国引きを繰り返している。風土記「国引詞章」では、4か所を引いて来て縫ひ付けるのであって、まだ足りないとして拡大を続ける話ではない。

③ 国引と韓国併合を結びつけ、さらなる国土拡大を主張しようとしている。

渋川玄耳が『古事記噺』を出版したのは、1910年8月22日に韓国併合条約が結ばれた直後だった。韓国併合が国引きを想起させたことが、「稿本」にもかかわらず出版することにした「少しく時勢に感ずる所」だった

のであろう。

作者の渋川玄耳は、本名渋川柳次郎、1872年佐賀県生まれで、長崎商業、独逸協会中学校、国学院、東京法学院に学び、司法試験に合格して判事になったという⁽²⁷⁾。古典の素養は国学院時代に培われたものではないかとされる。その後陸軍法官に転じ、日露戦争に従軍した。

日露戦争では満州を転戦し、海城の占領、沙河会戦、奉天会戦などの従軍記を東京朝日新聞などに寄稿している⁽²⁸⁾。この満州での従軍経験が、「国引き」と満州を結びつけることにつながったのであろう。

1907年に東京朝日新聞社に入社し、社会部長となった。1912年に退職するまでの間、夏目漱石を記者として招いたり石川啄木を抜擢したことで知られている。ちょうどこの時期に『古事記噺』を書いたことになる。

韓国併合と『古事記噺』出版の前年1909年の3月～7月にかけて、渋川玄耳は、横浜を出航しアメリカ、ヨーロッパを巡り、シベリア鉄道経由で帰国するという世界一周見物旅行を敢行している。帰国直後の10月には韓国へ渡り、統監府支配下の実情を取材し「恐ろしい朝鮮」と題した24回にわたる連載記事を東西朝日新聞に掲載している。日本人官吏の評判の悪さなども記されているが、渋川玄耳が韓国から帰国した直後に伊藤博文が暗殺されている。

このことは、『古事記噺』で「国引」の前に「朝鮮」の話が挿入されていることとも関係するだろう。その話は「八岐大蛇」退治のあと、素戔嗚命が櫛名田姫を妃として須賀の地に宮を営んだことを承けてはじまる。

素戔嗚命は出雲国須賀の都に在って、日本の北側の国々を治め玉ひしが、初め、父伊弉諾命より仰せつけられたる通

り、海外の国々をも治めようと思召して、御子五十猛命を随れて船に乗って西へ西へと風に任かせて、新羅の国に着かせられた。其処等の荒神ども悉く切り従へ、牛頭城（今の朝鮮江原道春川附近）といふ処に都を建て、朝鮮満洲其他の国々を御支配なされた。(p.57)

素戔嗚命が新羅に渡り、牛頭城（素戔嗚命）を都に朝鮮・満州を支配したとする。素戔嗚命が新羅の曾戸茂梨（素戔嗚命）に天下ったという話は『日本書紀』神代上第八段一書第四にみえる。続けて、

此の朝鮮といういふ国は、元々我天神の御子孫の支配あるべき、宝の国として、数多の金銀をも此の国に置いてあったのであるが、久しい間荒神共が住散らして、折角の此の好い国もさんざんに住み荒されて、山も野も枯れ果てて、憐れな様になって居た。素戔嗚命の御威徳を以て、次第に平かに豊かに為って来たものの、どうも樹木が乏しい。樹が無くては家を建てるにも、什器を作るにも、人民共が困るし、殊に日本との往来に浮宝（船のこと）が何より入用であるのに、其船を造る材料が無いのである。(pp.57～58)

朝鮮はもともとわが天神の子孫が支配すべき良い国だったのに荒れてしまったが、素戔嗚命のおかげでだんだんと豊かになってきた。しかし樹木がないとして、

そこで、素戔嗚命は、この国に樹を植ゑようと思召して天つ神を念じつゝ、御自身の鬚髯を引き抜いて、空に向って投げ散らし玉へば、ばらばらと地に落ちて、其が杉の叢立と為った。次に胸毛を攫んで投げ玉へば、轟々と檜が生えた。尻毛を雀（つばめ）って投げ玉へば槿（あじ）と為り、眉毛を摘（つま）んで投げ玉へば樟（かや）と為り、其外体中の

毛を抜いては投げ、抜いては投げ為たまへば、菓の樹其外種々の樹が生えたのである。

既に樹を蒔き了って、素戔鳴命は、杉と樟とは船に作れ、檜を以て宮を建てよ、などと、それぞれに数多の樹木の用ゐかたまでお示しに為った。(pp.58～59)と、『日本書紀』神代上第八段一書第五をモチーフにした話を続ける。そしてこの後に、「国引」の話が続き、韓国併合で締めくくることになる。

統監府支配から韓国併合へという状況を反映して、「朝鮮」「国引」という流れで話を構成しているように見える。

このように渋川玄耳の『古事記噺』『国引』の背景として、満州での従軍経験、伊藤博文暗殺の直前、韓国併合前夜の取材、そして韓国併合という状況を考えなければなるまい。

(2) 指導参考書の渋川玄耳「国引」

では実際に中学校の教科書に採録された渋川玄耳「国引」がどのように教えられることが期待されたのか、指導参考書を見てみよう。

『国文鑑 教授参考書』⁽²⁹⁾は「目的」を

この話の中に横溢してゐる国力発展の若々しい力を感じしめ、国を愛する念の内容を自覚させてゆく、一助たらしめたい。(p.213)

とし、「文意」を

国力発展神話ともいふべき出雲風土記の国引の話から明治四十三年日韓併合を思ひ合はせた文。(p.213)

と位置づける。「句意・語彙」の説明として、

眼孔博大、気宇濶達思ふ所悉く成るの気概が横溢してゐる。この偉さと力とを感銘した心には新羅から引寄せることでも、満州から引張ってくることで、

何でも出来さうだ。

余談として挙げた幾千萬年後の日韓併合も、この気宇偉力の実現らしく感じられる。(p.214)

「国引」の説明も

国土を他より引きよせてくることであるが、国力発展の力をよく象徴した言葉である。(p.214)

国引を韓国併合や満州と結びつけ、国力発展の象徴として理解させようとする。

『商業国文新編 教授参考書』⁽³⁰⁾でも、

遂に伝説的教材に至った。郷土的伝説としての本課は、「出雲風土記」の国引の話から日韓併合まで一脈の関係が連なつてゐる。乃ち日本帝国の発展はすでに三千年以前の神話に暗示されてゐることを述べてゐるのである。(p.243)

と、国引から韓国併合までつながることを明確に述べる。一方で

「あまり」の字に注意されたい。彼の国で不要として捨ておいた土地の意に解したい。更に「引寄せて」の字に注意したい。領土の対外的拡張でない。少なくとも侵略的拡張でない。本課の教授には特にかゝる点に就いて細心せられたい。(pp.243～244)

と、「日韓併合」を念頭に置きながら侵略的拡張ではないことを注意させる配慮も示している。

(3) 北原白秋「国引」と指導参考書

しかし渋川玄耳の「国引」は1930年代には中学校教科書からは姿を消す。かわりに、出雲、朝鮮、満州という具体的地域をはずして、日本国拡大の国引として抽象化された話として小学校国定教科書に採用されていく。

一方、中学校の教科書には北原白秋の「国

引」をモチーフにした詩が登場する。富山房から1937年に出版された『帝国読本』巻1⁽³¹⁾に採録されている。

もそろもそろと何を引く、
海の向かふの国を引く。
もそろもそろと何で引く、
綱で引く引く浜に引く。
浜はとほなぎよい日和、
引くは神々群れて引く。
出雲わか国まだ小さい、
国よ来い来いそろと来い。
あまる新羅のあの出端、
鋤で引き引き綱で引く。
もそろもそろと来た国は、
一に杵築よ、二には狭田。
三に闇見よ、四には三穂、
国よ来い来いそろと来い。
海ははるばる日はのぼる、
えいや神々国を引く。(pp.96～97)⁽³²⁾

指導参考書『国語科教授の実際—帝国読本提要』⁽³³⁾（以下『帝国読本提要』）は、まず

白秋は明治詩壇の末から大正詩壇の初頭へかけて、従来の我が国の詩に見られなかった新しい感覚の火を放った詩人である。その語彙の豊富なこと、その才藻の卓越せること、その言葉に対する感性即ち語感の敏感鮮明なことは詩壇独歩の観がある。この詩人ぐらゐ国語を自由に使ひこなし、また国語を多方面に生かした詩人は少ない⁽³⁴⁾。

と、北原白秋の詩人としての評価を示したうえで、詩としての鑑賞を中心に説明する(pp.214～215、p.218)。

出典についても、

八束水臣津野命が、「出雲国は幅の狭い稚国である。初国造りに小さく作ったのである。大きくしよう。」といて、志

羅紀之三崎、北門佐岐乃国、北門良波乃国、高志之都々乃三崎に見える国に、三縊りの太い綱を掛けて、「国来、国来。」と引寄せた。そしてこれを出雲の国に縫い堅め、ここに望み通りの国を完成して、意宇杜に杖を衝き立てて、国引もすんだので意恵と叫んで、この地を意宇郡と名附けたといふ。(pp.213～214)

と、ほぼ『出雲国風土記』に従った説明をしている。「解釈」の部分では「まだ小さい」の表現に対して、

出雲の国生みは、諾冉二神の国生みの時、小さく作ったのであると説く説(栗田寛博士)もあるが、『出雲風土記』の全般に互って諾冉二神に殆ど触れてゐないこと、八束水臣津野命が『古事記』に挙げた大国主神の祖淤美豆奴神と同一の神らしく、従って出雲系の神格であること、『出雲風土記』の諸所にこの神の名や行動が見えて、出雲文化の促進に大きな功績のあった人物と信ぜられてゐたらしいこと、出雲系民族は高天原系民族のそれから独立した国土生成の神話群を有してゐたらしい形跡が存することなどから推して、諾冉二神の国造り神話とは別にして考ふべきであらうと松村武雄博士はいつてゐる。(p.216)

と、伊弉諾・伊弉冉の国生みを前提に『古事記』神話と結びつけて「国引」を位置づけようとする当時一般化しつつあった解釈に反論し、神話学者松村武雄の説に拠ってあくまでも別のものとして考えるべきだと説明する。

さらに最後に、「資料篇」の「参考研究」として「神話の意義、日本神話の特徴、及び国引神話の地位等に就いて略述を試みる」とする(p.218)と、筆者自身の神話論を展開する。

要するに我が神話には北欧神話の峻烈さやギリシヤ神話の精煉さには缺けてゐる。その代り、たとへ政治的傾向に矯められてゐるものの、尚、純真さを失ひきらずにゐることは、民話として尊むべきものがある。(p.219)

と、民話、民間伝承を根底にとらえようとして、

出雲風土記は、和銅六年の詔に基いて出来た風土記の一で、五風土記(出雲、常陸、播磨、豊後、肥前)中、現存せる唯一の完本である。文体は国文脈を交へた漢文体である。出雲系の神話に富んでゐる点で、文学的の価値がある。出雲系神話といふのは、所謂出雲系民族の有した説話群で、素戔嗚尊を祖神とし、大国主命を建国創業の神とし、この二神を中心として纏め上げられてゐる説話圏を意味する。出雲系神話は高天原系神話から独立した天地創生神話や建国神話を有してゐたらしく思はれる。その意味で国引神話は諾冉二神の国生神話とは別個のものとして考ふべきであらう。(p.219)

と、「出雲系民族」の有した「出雲系神話」の概念を示して、『古事記』『日本書紀』とは別個の神話としてとらえるべきことを強調する。

伊弉諾・伊弉冉の「国生み」や、素戔嗚など『古事記』の話と国引を合せて再話したり、韓国併合や日本国土の拡大などと重ね合わせた説明をする『古事記』や他の指導参考書類とは一味違っている⁽³⁵⁾。

3. 再話される「国引」

(1) 『古事記』神話体系と「国引」

1920～30年代の中学校教科書、1933年

～45年の小学校・国民学校教科書の「国引」とその指導書類、出典となった『古事記』をみてきた。その背景には、明治期後半から再話される『古事記』の存在がある。再話される『古事記』神話の中に「国引」の話も組み込まれ、その一部をなしていく動きがあった。

改めて『古事記』の構成を掲げてみる。

世界の始、神々の降誕、黄泉国、日神月神の誕生、日月の不和、素戔嗚命、子生み競争、天の岩戸、八俣大蛇、朝鮮、国引、裸兎、八十神の難、鼠と鎗矢、小き神、雉の使、国譲り、天孫降臨(以下略) 高天原から天下った素戔嗚命が八岐大蛇を退治する話と、素戔嗚命の神裔大国主神の話—ここでは「因幡の素兎」の話の間に「国引」が挿入されている。

これは『出雲国風土記』の八束水臣津野命が、『古事記』に記す淤美豆奴神と同一だとする解釈に基づいている⁽³⁶⁾。淤美豆奴神は素戔嗚命の四世孫で、大国主神の祖父神なので、素戔嗚命の話と大国主神の話の間に「国引」が入ることになる。

『古事記』以前はどうであろうか。表「再話された国引 1901—1945」に、現時点で確認している再話された「国引」を整理した。たとえばその初期の1902年出版の『少年世界文学 第3編 神代のはなし』⁽³⁷⁾の構成は、
天の浮橋、天の岩戸、八岐の大蛇、白兎、
天の返し矢、高千穂の峰、山幸と海幸、
天香具山、天橋立、童女松原、国引
と、『古事記』からの話の後、最後に「国引」が付け加えられている。

1906年出版の梶野勇『家庭夜話百題』⁽³⁸⁾は第二編「昔々譚」のなかに「国引」の話を入れているが、

夜見の国、海神の宮、因幡の白兎、出雲

の国引、蟻通の神、敦賀あらしと（以下、略）

と、とくに『古事記』の話とあわせて体系だって構成されてはいない。

『古事記噺』の翌年1911年出版の『少年日本歴史読本 第2編 大国主神』⁽³⁹⁾（以下『大国主神』）では、

国引、因幡の白兔、大国主神、八十神の陰謀、第二の危機、蛇の室（以下、略）と、「国引」を冒頭においているが、第1編『天の浮橋』の最後は「八俣の遠呂智」と「須賀の宮居」であり⁽⁴⁰⁾、第1編～第2編を通すと、素盞鳴命の話と大国主神の話をつなぐ位置に配置されていることがわかる。『古事記噺』と類似する構成になっている。

1912年の『歴史お伽 日本神代噺』でも天浮橋、黄泉国、橘小門、天岩戸、簸川上、国引、因幡の白兔、気多ヶ崎、手間山の赤猪、蛇の室屋、天之罹拳船、雉子の御使、伊那佐の小浜、高千穂の峯と、「簸川上」（素盞鳴の八岐大蛇退治）と「因幡の白兔」の間に配置される。

1916年の小笠原省三『日本神代物語』⁽⁴¹⁾は、「天地創造」から「東国遷都」（神武東征）までの『古事記』の再話の後に、「附録」として「国引」を置いている。一方で同じ小笠原省三が高木敏雄と編著した『日本国民伝説』⁽⁴²⁾は、「八岐の大蛇」と「因幡の白兔」の間に「国引」を配置している。「国引」の話自体は、両書は同文である⁽⁴³⁾。

1918年の大西貞春『太古の神様の物語』⁽⁴⁴⁾も、「大蛇退治」、「国引の話」、「大国主神の話」、「国譲りの話」の順に話が配列されている。「大国主神の話」の冒頭が「因幡の白兔」の話である。「国引きの話」自体は、素盞鳴命が朝鮮で樹木を生育させる話の後、淤美豆奴神とその国引きの話へと展開する⁽⁴⁵⁾。

話の構成や「国譲り」の語を使用するなど、『古事記噺』の影響がうかがえる。

1921年の『標準於伽文庫 日本神話』は世界の初め、黄泉の国、天の岩戸、八岐大蛇、白兔、賭、国引、雉のお使い、国譲り、高千穂の峯、人の命、海幸と山幸、櫃原宮

と、「因幡の白兔」の話と「国譲り」の話の間に配置している。これはそのまま1924年松村武雄『世界童話大系第16巻 日本童話集』に採録されている。「因幡の白兔」と「国引き」の順序が他とは逆転しているが、素盞鳴命の話と国譲りの話の間に位置していることは変わりがなく、この位置が再話される神話体系の中で重要な意味をもつと考えられる。

1921年の楠山正雄『日本童話宝玉集』でも、第一部四「素盞鳴命」のなかに、「八岐の大蛇」「国引き」「樹の種」の順に話が展開し、五「大国主命とその兄弟」の冒頭「白兔」へと続く構成をとっている⁽⁴⁶⁾。

このように、1911年の『古事記噺』あたりから、風土記の「国引き」が『古事記』再話の中に組み込まれ、素盞鳴命の話、国引き、大国主の話、国譲りという再話される神話構成が成立し、1920年代にかけて定着していく過程を見ることができる。

こうした点も、1920年代の中学校教科書を経て、1930年代に小学校教科書に「国引き」が登場する前提として注意すべきである。

（2）国土拡張と「国引」

この「国引」の配置は、単に淤美豆奴神が素盞鳴尊と大国主神をつなぐ位置として組み込まれた以上の意味を持たされることになる。

1911年の萩野由之『大国主神』では、冒頭の「第二篇 大国主神 解題」で次のように記

す。

大国主神の仁慈、威徳を経とし、これに関連したる幾多の物語を緯とし、更に天孫降臨の端を開くまでの事蹟を一篇としたのが、即ち此の巻である、蓋し天孫降臨以前に、出雲地方に在りて、蒼生の撫育、国土の経営に尽くした大国主神は、非常に英邁の御質であつたと同時に衆望を一身に集めて居られた。そして天孫降臨に先立って、其国土を悉く献上された一事は更に此の神の一生に、一大光輝を放たしめたのみならず、古くは孝徳天皇の御世の大化改新の事、近くは維新の際の徳川慶喜公の大政奉還の事業とよく似てゐる所があつて古今の政変を比較して見るにも大切な所である。(pp.1～2)

大国主神の最も重要な点として、天孫降臨の前提としてのいわゆる「国譲り」をあげている。そして「国引」の最後には、次のように語る。

夫れにしても我大日本帝国は、神代のむかしより、既に地を海外に求めて、国土の発展をなされたのである。曩には須佐之男命が、朝鮮を御支配なされ、今また臣津野命が彼地より、国土人民を引寄せて、日本帝国の進歩発達に御尽力なされたのである。(pp.9～10)

と、大日本帝国の「国土の発展」の先例として神代の須佐之男命の朝鮮支配、八東水臣津野の国引をあげる。

さるにても神代より、数千万歳の後の、明治四十三年となつて、大昔臣津野命が、引き残して置かせられた朝鮮国の全部は大きな鋤も三自の綱も杵も入らずに、自然に日本の国の光に引き寄せられて、明治天皇陛下の御支配の下に、彼の国土の人民達は、最も幸福なる、最も安楽な

る、生活を送ることが出来る様になつたとは、何と愉快に何と有り難いことではないか。(p.10)

と、国引と韓国併合を結びつける。さらにも未だ此の広い世界の中には、智と仁と勇との、三自の綱の力にて、日本帝国に引寄せられるものが、此先必ず出来るであらうから、未来の帝国を負ふて立つべき少年は、決して一日も遊惰に送つてはならないのである。益々奮励して、諸神の御遺徳に酬い、陛下の御高恩に答へまつらねばならぬ。(pp.11)

と、さらなる帝国の拡大と、そのための「少年」たちへの奮励の呼びかけで結んでいる。「奮励」の部分を除くと、『古事記』の「国引」の最後と同じ趣旨である。

単に国引きによって国土の拡大をするだけでなく、拡大した国土を天孫に国譲りする、拡大した国土を支配する天皇とその偉大さを称える構造を見て取ることができる。

このように再話される「国引き」は拡大する国土と天皇を支える神話へと位置づけられ、それは1940年代には「大東亜共栄圏」と「八紘一宇」を説明する論理としても利用されていくことになる。

(3) 島根・鳥取県で再話された「国引」

1912年5月に岩田勝市が鳥取市の横山書店から出版した『山陰道昔話』⁽⁴⁷⁾は、冒頭に「国引」の話を置く。新羅の国の余りを引いて来た後、

つぎに、まだ余つてゐる国はないかと検べられますと、満州の方に余つてゐる所がありましたので、又、ザクリと切り放つて「国来々々」と引張つて来て狭田国をつくられ、尚も足りなかつたと見えて同じく満州の方から陸地を切り取つ

て、闇見国をつくられました。皆出雲の一部となつてみます。(p.3)

と、2回にわたって満州の方から陸地を引いて来たとする。最後に

臣津野命はこのやうにして出雲国を造り固められましたが、今日では朝鮮は我国の国引されて寄つて来ました。満州も国引で引き寄せ樺太も引き寄せました。今度は何処を国引するのでありませう。(p.4)

と記している。『古事記噺』の影響を受けていると思われるが、山陰地域でも朝鮮・満州と国引を重ね合わせて再話されていた。

その1912年6月、大隈重信は久米邦武らとともに、3月に京都一出雲今市間が全通したばかりの山陰線を使って、鳥取・島根両県を巡見した。その巡見記として記されたのが久米邦武の『裏日本』だった⁽⁴⁸⁾。

6月2日、島根県師範学校で久米邦武は古代の出雲について講演する。

国初にあつては倭と韓は一国であつた。此出雲より新羅を兼領せられ、因て此地は新羅と筑紫と交通の衝に当り、大陸に向つて盛んに発展せられたる処である。(p.131)

と説く。しかしその後、

天智天皇の初め新羅が唐の兵を引入れて百濟高麗と開戦し、我国より二国に援兵を送つたけれども、……滅亡し、両国王をば我国に引取つて保護を加えられ、是時より新羅を拒絶し、対馬海を以て両国の境を定むることゝとなつたに於て、出雲は是より国の西北隅なる一僻地と成果る初めとなつたのである。(p.132)

と、百濟・高句麗滅亡後、新羅を拒絶していったことが、出雲の僻地化の始まりだとする。

それでも中世には「依然と海外に向かつて活動し、山陰海岸よりは尚盛んに朝鮮支那と交通し活動して居た」(p.133)が、「徳川時代に至り政略上に鎖国主義を採り」(p.133)、「山陰道はいよいよ交通の不便な中国の裏面に僻在する地と成果て」(p.134)てしまったとする。国引に対しても、

兎角外に向つて発展するに意はなく、座ながら国内に引き寄せんと思ふは鎖国的の思想に病めるのである。(pp.137～138)

と、内向きで「鎖国的の思想」と批判する。しかし「前年日露戦争の結果は既に倭韓の合一を見るに至つた、是れ上古の時代に復歸したのである」(p.138)とし、続けて

是より更に海上に向かつて大なる発展を計画しなければならぬ。現今の地勢では既に日本海の周囲は大抵我版図に入れてゐる。即ち我邦の境域は此の対岸にまで延て、日本海は真に其名の如くになり、其形は宛も東京湾と同様である。出雲は江戸の位置に当り、韓は房総一帯の対岸地にも比すべき形(略)(p.139)

とし、これからは、「支那海に進みて満州支那に渡航し」、さらに南に向かつて台湾、フィリピン、南洋諸島まで海上の往来活動を発展させなければならないと説く(p.139)。

この松江での講演もまた「国引」と海外に対する一つの見方である。しかしその後の「国引」の再話は、満州、中国、フィリピン、南洋諸島と膨張する「大日本帝国」と重ね合わされていくことは、見てきたとおりである。

では、当の出雲国、島根県ではどうだったのか。1933年の簸川郡東村尋常高等小学校編『郷土読本』巻3の「国引」は、再話される『古事記』神話体系とは切り離して単体で記される⁽⁴⁹⁾。そこでは

このふしぎな力をもって、出雲の国をつなぎ合わせなさった八束水臣津野命は、今の簸川郡園村にある長浜神社におまつりしてあります。(p.34)

と、「郷土」の神の話として締めくくられる。

翌1934年の島根県八束郡教育会編『郷土読本』巻1でも「国引神話」を採録している⁽⁵⁰⁾。大筋としては風土記の「国引詞章」にのって出雲国の国引きとして語られるが、

かうして、神代から幾千年を経て、彼のちぎり残りの朝鮮全部が、我が日本に引かれてしまふことになった。

まだまだ、世界には我が智・仁・勇三つよりの綱を打ち掛けて、引き寄すべき国が幾つもあるであらう。(p.7)

と『古事記噺』からの引用で最後を結んでいる。

小学校国定教科書に「国引」が登場した同じ時期に島根県で編集された『郷土読本』でも、異なった取り上げ方をしている。地域の教育現場でどのように「国引」がとりあげられ、受容されていったのか、本稿ではほとんど扱うことができず、課題として残されている。

むすびにかえて

本稿では再話され変貌していく「国引神話」を近代、それも日露戦争前後から昭和戦前期、1945年までを、教科書を手掛かりに追ってみた。

この時期の教科書や指導書については、分厚い教育史の研究の蓄積がある。再話される『古事記』、児童文学の研究も進展している。これらの研究だけでなく、なによりも近代史の研究を十分にふまえないまま、資料の紹介と問題点を挙げただけに終わってしまった。

それは今後の課題になるが、このような話を、「国引詞章」や風土記の研究史、あるいは地域史のなかに位置づけるための問題提起になればと考える。

付記

本稿は、JSPS 科学研究費基盤研究 (C) 「地域における神話的古代出雲像形成とその歴史的 성격の研究」(2020～2022年度、代表者大日方克己) による研究成果の一部である。

註

- (1) 本居宣長『古事記伝』、『出雲国風土記 意宇郡古文解』、『玉勝間』、内山真龍『出雲風土記解』、伴信友『出雲風土記国引考』、など。
- (2) 武廣亮平「『国引神話』研究史」『出雲古代史研究』1、1991年。
- (3) 立岡裕士「児童向けに再話された風土記説話の目録ならびに索引」(『鳴門教育大学研究紀要』32、2017年)のなかで、再話された「国引神話」も採録している。また子ども向けの『古事記』の再話については、田中千晶「児童向け『古事記』等作品目録〈近代編〉」『神戸常盤短期大学紀要』28、2006年、など。
- (4) 小林佐源治『小学国語読本 新指導書 尋常科第二学年前期用』、三省堂、1934年。
- (5) 松村武雄編『世界童話大系 第16巻 日本童話集』、世界童話大系刊行会、1924年、pp.55～62。
- (6) 森林太郎・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑編著『標準於伽文庫 日本神話 上』、培風館、1921年、pp.175～195。
- (7) 長谷山峻彦『続児童唱歌劇集』、大正書院、1929年、pp.143～162。
- (8) 桔梗郎「国引」『歴史お伽 日本神代噺』、

- 博多成象堂、1912年、pp.99～112。
- (9) 『日本神代噺』では、『古事記』に従って淤美豆奴神とする。『古事記』上巻では、淤美豆奴神は須佐之男命の四世孫であり、その孫が大国主神だとする。八東水臣津野命と淤美豆奴神が同じとする解釈は本居宣長あたりまでさかのぼる。
- (10) 三浦藤作『実演学校劇 尋二の巻』、東洋図書、1935年、pp.68～80。
- (11) 『実演学校劇 尋二の巻』「凡例」、p.4。
- (12) 『実演学校劇 尋二の巻』「尋二各種教科書教材との連絡一覧表」、p.2。
- (13) 『よみかた三 教師用』、1941年、pp.39～64。
- (14) 文部省『ことばのおけいこ』3、pp.9～11。
- (15) 『よみかた三 教師用』、p.85。
- (16) 渋井二夫『最新国民体育舞踏教本』第13輯、新生閣書店、1941年、pp.136～137。
- (17) 橘与志美「第二次世界大戦下における小学校教育に関する研究」『大東文化大学紀要 社会科学・自然科学』45、2007年。
- (18) 渋川玄耳『日本神典古事記噺』、博文館、1910年、pp.60～62。
- (19) 明治書院編『国文新選』2、明治書院、1924年、pp.135～138。
- (20) 千田憲編『新編国文読本』1、右文書院、1926年、pp.13～16。
- (21) 垣内松三編『国文新編1 第1学年用(改訂版)』、明治書院、1926年、pp.309～311。
- (22) 垣内松三編『国文鑑』1、文学社、1927年、pp.323～327。
- (23) 垣内松三編『商業国文新編』、明治書院、pp.292～294、1928年。
- (24) 国立教育政策研究所教育図書館・近代教科書デジタルアーカイブに拠る。
- (25) 芳賀矢一編、上田万年・長谷川福平訂補『帝国読本』1(改制新版)、富山房、1937年、pp.96～97。
- (26) 本稿では『出雲国風土記』は、細川家本などの古写本や最新の校訂本ではなく、あえて栗田寛纂註『標註古風土記』(初版、大日本図書、1899)を使用した。底本は千家俊信『訂正出雲風土記』(文化3年(1806)開板)。本稿で取り上げる指導書等の多くが『標註古風土記』を引用していること、渋川玄耳も「くりごと」で『古風土記』と記し、『標註古風土記』に拠っていると思われることによる。
- (27) 渋川玄耳の経歴については、森田一雄『野暮たるべきこと—評伝渋川玄耳』(梓書院、2005)参照。
- (28) その後、『従軍三年』として出版された(春陽堂、1907年)。そのなかの「奉天占領」も藤村作・島津久基共編『中等新国文』2(改訂、訂正3版、至文堂、1934年、pp.150～166)に採用されている。
- (29) 垣内松三編『国文鑑 教授参考書』1、文学社、1927年。
- (30) 垣内松三編『商業国文新編 教授参考書』、明治書院、1928年。
- (31) 芳賀矢一編、上田万年・長谷川福平訂補『帝国読本』1、富山房、1937年。
- (32) 北原白秋『白秋童謡読本 尋五』、采文閣、1931、pp.132～133、北原白秋『国引一童謡集』、帝国教育会出版部、1943、pp.97～99、にも収録。教科書とは、漢字表記、読点が若干異なっている。
- (33) 富山房編集部編『国語科教授の実際—帝国読本提要』巻1、富山房、1937年。
- (34) 『帝国読本提要』巻1、pp.214～215。
- (35) この時期の富山房編集部には石母田正

- が在職していた。『石母田正著作集』第16巻（岩波書店、1990年）の年譜によると、1937年4月に富山房に入社し編集部に配属された。富山房を退社したのは1943年4月（「年譜」pp.1～2）。『帝国読本』の出版は1937年7月、『帝国読本提要』は1937年11月である。
- (36) この解釈は、本居宣長『古事記伝』一、『玉勝間』、『出雲風土記意宇郡古文解』あたりまでさかのぼる。それ以前、たとえば荷田春満『出雲風土記考』では、八束水臣津野命は「素盞鳴尊の一名也」としている（自筆本、『新編 荷田春満全集 第3巻 日本書紀・風土記』、おうふう、2005年、p.391）。
- (37) 坪内雄三校閲、富山房編集部編『少年世界文学 第3編 神代のはなし』、富山房、1902年。
- (38) 梅野勇『家庭夜話百題』、霊文館、1906年。
- (39) 萩野由之編『少年日本歴史読本 第2編 大国主神』、博文館、1911年。
- (40) 萩野由之編『少年日本歴史読本 第1編 天の浮橋』、博文館、1911年。
- (41) 小笠原省三『日本神代物語』、広文社出版部、1916年。
- (42) 高木敏雄・小笠原省三『日本国民伝説』敬文館、1917年。
- (43) 『日本神代物語』、pp.137～140、『日本国民伝説』、pp.38～41。
- (44) 大西貞治『太古の神様の話』、飛行社、1918年。
- (45) 『太古の神様の話』、pp.70～76。
- (46) 楠山正雄『日本童話宝玉集』上、富山房、1921年。
- (47) 岩田勝市『山陰道昔話』、横山書店、1912年。岩田勝市は、「山陰鉄道唱歌」を作詞（『山陰鉄道唱歌』、関西新報社、1911年）、『因伯珍談』（横山書店、1914年）、『因幡伯耆方言輯録』（岩田勝市、1931年）、『因伯立志偉人伝』（横山書店、1932年）などを出版している。
- (48) 久米邦武『裏日本』、公民同盟出版部、1915年。
- (49) 簸川郡東村尋常高等小学校編『郷土読本』巻3、1933年、pp.33～34。簸川郡は現在の出雲市の大部分にあたる。長浜神社は簸川郡内。
- (50) 島根県八束郡教育会編『郷土読本』巻1、1934年、pp.4～7。八束郡の大部分は現在の松江市にあたる。

近代教科書と再話される「国引神話」

表 再話された国引 1901～1945 (稿)

	出版年	編著者	書名	出版社	ページ	備考
1	1902	富山房編集部 坪内雄藏校閲	少年世界文学 第3篇 神代のはなし	富山房	76～78	国引
2	1906	梅野勇	家庭夜話百題	霊文館	76～78	出雲の国引き
3	1910	渋川玄耳	日本神典古事記噺	博文館	60～62	国引
4	1911	萩野由之	少年日本歴史読本 第2編 大国主神	博文館	1～11	国引
5	1912	岩田勝市	山陰道昔話	横山書店	1～4	国引
6	1912	桔梗郎	歴史お伽 日本神代噺	博多成象堂	99～112	国引
7	1916	小笠原省三	日本神代物語	広文社出版部	137～140	国引き
8	1917	高木敏雄 小笠原省三	日本国民伝説	敬文館	38～41	国引き
9	1918	大西貞治	太古の神様の話	飛行社	70～76	国引の話
10	1921	森林太郎 松村武雄 鈴木三重吉 馬淵冷佑	標準於伽文庫 日本神話	培風館	175～195	国引
11	1921	楠山正雄	日本童話宝玉集 上巻	富山房	39～42	国引き
12	1924	明治書院	国文新選 2	明治書院	135～138	渋川玄耳・国引
13	1924	松村武雄	世界童話大系 第16巻 日本童話集	世界童話大系 刊行会	55～62	国引
14	1925	明治書院	国文新選教授参考書 2	明治書院	106～109	渋川玄耳・国引
15	1925	児童読物研究会	文芸読本 3	杉本書店	53～55	国引
16	1926	千田憲	新編国文読本 1	右文書院	13～16	渋川玄耳・国引
17	1926	垣内松三	国文新編 1 第1学年用 (改訂版)	明治書院	309～311	渋川玄耳・国引
18	1926	吉田助治	児童図書館叢書 第16篇 日本の神話	イデア書院	33～35	国引
19	1927	垣内松三	国文鑑 1	文学社	323～327	渋川玄耳・国引
20	1927	垣内松三	国文鑑—教授参考書 巻1	文学社	213～215	渋川玄耳・国引
21	1927	町田桜園	学校史劇 第2編 神代の巻 2	盛林堂書店	14～24	国引き
22	1927	教育研究会	文化中心新教授大系 第4巻	教育研究会	29～37	国引きの考察
23	1928	垣内松三	商業国文新編	明治書院	292～294	渋川玄耳・国引
24	1928	垣内松三	商業国文新編教授参考書	明治書院	242～245	渋川玄耳・国引
25	1929	五味義武	低学年教育童話教材と其の活用 尋常 第2学年	南光社	421～427	国引
26	1929	長谷山峻彦	続児童唱歌劇集	大正書院	143～162	奉祝国引き
27	1931	北原白秋	白秋童謡読本 尋5	采文閣	132～133	国引
28	1932	千田憲	新編国文読本新制版参考書 巻1	右文書院	179～182	渋川玄耳・国引
29	1933	簸川郡東村 尋常高等小学校	郷土読本 巻3	簸川郡東村 尋常高等小学校	33～34	国引
30	1934	島根県八束郡 教育会	郷土読本 巻1	島根県八束郡 教育会	3～7	国引神話
31	1934	文部省	小学国語読本 巻3	文部省	30～34	国びき
32	1934	小林佐源治	小学国語読本新指導書 尋常科 第2学年	三省堂	229～245	国びき
33	1935	三浦藤作	実演学校劇 尋2の巻	東洋図書	68～80	国びき
34	1935	丸山林平	少年大日本史 第9巻	建設社	10～16	国引
35	1935	鈴木健一郎	少年建国読本	立命館出版部	173～174	臣津野命の国引き

	出版年	編著者	書名	出版社	ページ	備考
36	1936	千田憲	新編国文読本1 (第4版)	右文書院	151～154	渋川玄耳・国引
37	1937	芳賀矢一 訂補上田萬年/ 長谷川福平	帝国読本 巻1	富山房	96～97	北原白秋・国引
38	1937	新田寛 編	小学国語読本原拠集成 詳註口訳 尋1・2篇	厚生閣	84～91	国引・出雲国風土記
39	1937	富山房編集部	国語科教授の実際 帝国読本提要	富山房	213～217	北原白秋・国引
40	1938	中西芳朗	神話美談	コドモ芸術学園	228～235	国引き
41	1938	一貫会	日本精神文化史 第2講 (神代篇上巻)	一貫会	49～50	国引き物語
42	1938	大木雄二	日本神話	金の星社	74～84	国引き
43	1939	尾竹国観	講談社の絵本 第2巻 第5号 日本よい国建国絵話	講談社	22～23	国ビキ
44	1940	小野直	実演童話 国引き	教育研究 510		国引き
45	1941	文部省	よみかた3	文部省	12～15	国引き
46	1941	文部省	ことばのおけいこ3	文部省	9～11	国引き
47	1941	文部省	うたのほん 下	文部省	10～11	国引き
48	1941	文部省	よみかた 三 教師用	文部省	79～86	国引き
49	1941	文部省	うたのほん 下 教師用	文部省	64～67	国引き
50	1941	文部省	国民科読方授業細案 第3初2前期用	文部省、明治図書	36～46	国引き
51	1941	荒井正規 石井亘	芸能科音楽授業細案 初等科2年用	明治図書	97～107	国引き
52	1941	渋井二夫	最新国民体育舞踏教本 第13輯	新生閣書店	136～137	国引き
53	1941	佐藤春夫	新日本少年少女文庫 第12篇 日本文学選	新潮社	23～26	国引きの話 (出雲風土記から)
54	1942	納富康之	皇国の肇め 神代の巻	汎洋社	58～64	国引
55	1942	楠山正雄	日本神話英雄譚宝玉集 第1冊 天の浮橋	富山房	58～63	国ひき
56	1942	公手喜代史	日本創世記 古典神ながらの教	昭和教学社	65	出雲の国引き
57	1942	岡田稔	少年興亜読本	統正社	41～43	国引きませる水臣津 野命
58	1943	佐野保太郎	少国民日本文学 神代の物語	小学館	68～73	国引きの神様
59	1943	北原白秋	国引一童謡集	帝国教育会出版部	97～99	北原白秋・国引
60	1943	各務虎雄	日本の神さま	弘学社	57～61	くにびき
61	1943	瑞原伸彦	少国民神典大國主神さま	会通社	16～23	国引
62	1943	関谷健哉	錨	海洋文化社	234～239	国引き
63	1943	中村直勝	国史の話	全国書房	16～24	出雲の国引き
64	1944	古屋芳雄	日本民族渾成誌 特に大陸との関係について	日新書院	21～22	出雲風土記の国引き

- ・ [] は教科書 [] は指導書・参考書
- ・ 出雲国風土記からの引用のみのもの、および注釈書は採録していない。
- ・ 本表作成に当たっては下記を参照した。
 立岡裕士「児童向けに再話された風土記説話の目録ならびに索引」(『鳴門教育大学研究紀要』32、2017)
 国立国会図書館デジタルアーカイブ
 国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ
 広島大学図書館教科書コレクション画像データベース

